

シンポジウムを終えて (「21世紀 心理療法とその意味 - 言葉/イメージ/宗教性 -」 - 2002年度 学術フロンティア・シンポジウム報告)

著者	横山 博
雑誌名	心の危機と臨床の知
巻	4
ページ	83-84
発行年	2002-12-20
URL	http://doi.org/10.14990/00002488

シンポジウムを終えて

司会 横山 博

二〇〇二年七月七日に行われた第四回シンポジウムは、学術フロンティア事業最後の企画で、七〇〇人以上の方が参加してくださり、盛況の内に幕を閉じた。二〇〇一年十月から、ほぼ毎月の割合でこのシンポジウムに向けての研究会を重ね、さまざまな角度から「心理療法」という、そう簡単には捉え切れない問題を深めてきた。

思えば、フロイト、ユングという両巨匠が、「精神病は脳病である」という当時の命題を打ち破り「無意識の発見」に至り、精神分析さらには、精神療法、ないしは心理療法といわれるものの礎を築いていったのは、二十世紀初頭であった。それはいわばころころというものの捉え方において、自然科学的実証主義からの離脱の過程でもあり、心理療法を志しているわれわれは、この二人の巨匠の影響なしにはこの問題を語る事ができない。二十世紀とは、あらゆる意味で西欧の近代合理主義が跋扈して、資本主義は産業資本主義から帝国主義へと発展し、列強同志の飽くなき戦争で殺戮を繰り返した世紀でもあった。一方で近代合理主義の鬼ともいうべきマルクス主義が生まれ、資本主義と社会主義という冷戦構造の

なかに世界は閉じ込められた。こつした社会の流れのなかで、精神医学や臨床心理学は、時代の流れのなかで社会的、個人的レベルで引き裂かれていくこころの病の姿と直面してきた。とりわけ狭義の精神分析から、ユングの分析心理学も含め、臨床心理学へと発展していく過程は、こころの問題を、自然科学から離れたいわば経験科学の手に、宗教から奪っていくことを意味していた。しかし一方でそれは、科学的な明晰性では説明し切れないこころの暗闇の問題に直面せざるを得ないことを次第に明らかにしていく過程でもあった。すなわち心理臨床のなかに、かつては非科学的として切り離れた宗教性をもう一度考慮しなければならぬ時点に、今や到達しているのである。

そして今、二十一世紀の入り口にわれわれは立っている。この世紀は、二十世紀の世界のあり方を根底から変えた。冷戦構造は崩れ、イスラム教国家とアメリカとの対立構造をとりつつ、そこには南北問題や環境問題、さらにはアメリカ一極支配のひずみなど、二十世紀初頭の混乱とは位相の違った混乱を抱えている。日本だけを見ても、未曾有の不況と失業者の増大、驚くような犯罪の増加、虐待そして不登校の増加と、ユングの使う意味で集合的世界は相当な混乱のなかにある。そしてその集合性を一つにまとめるようなイデオロギーも宗教も欠いた現在、心理療法へのニーズの拡大はわれわれの能力を超えるほどに高まっている。

このような時代性のなかでわれわれ心理療法家が何をできるかを問うてみるために、今回のシンポジウムを企画した。

そのキーワードとして、「言葉/イメージ/宗教性」を挙げ、シンポジスト、指定討論者の諸氏にはそれぞれの立場から、このどれかのキーワードを切り口として発言していただいた。ここで個別に論ずる余裕はないので、詳細は紀要本文を見ていただきたい。ただ、さまざまなことが改めて明らかになったように司会者には思えるということだけは記しておきたい。つまり、言葉を重んじたフロイトの実際の臨床では、彼の理論(言葉)を超えたものが働いていたことが第一である。そしてそれらの言葉の背後には、静かな響きとして宗教的なるものが現前していることが第二である。さらに第三として、イメージの持つ超越的な力が祈りにも似て治癒力を発揮することである。第四には、集合性のほころびはともすれば人間の持つ破壊性を漏れし、「踏み越え」が起こり得るといふことである。こつした内容に関わる演者の発言は、参加された人々に強い印象を残したと筆者は確信する。ただ問題が総花的となり、心理療法の現在の課題に焦点を与えていないとすれば、それはこのシンポジウムを組織した司会者の責任である。しかしこのシンポジウムは公開のもので、専門家以外の方や学生諸君もたくさん参加しておられ、専門性を深めるといふ点では限界があることを御容赦願いたい。

このシンポジウムを通して、心理療法なるものが医学的モデルや教育的モデルと違って、それらを包摂しつつも別の位相で機能していることがこれらの人たちに伝わっておれば幸いである。そしてさらに、この世紀が民心を統一するような強い集合的価値観に欠けるがゆえに、ここを病む個々が、

個々に心理療法家と出会い、ユングの概念である個性化過程にイニシエートしていかなければならないのであり、二十一世紀における心理療法とは、それに随伴することが責務であるということ全体をコンセンサスにできれば、司会者の幸甚とするところである。最後に参加してくださった聴衆の皆さん、裏方で長い間準備をして、当日も裏方として働いていただいたスタッフの皆さん、そして忌憚のない御意見を報告くださったシンポジスト、指定討論者の皆さんに多大なる謝意を述べて締めくくりたい。